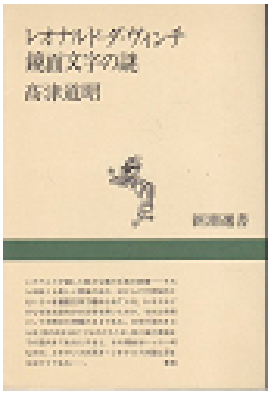
「文学に普遍性はありますか？」

中山　文（教育推進センター）

白洲正子“ほんもの”の生活
白洲正子[ほか]著 / 新潮社刊；2001



レオナルド=ダ=ヴィンチ鏡面文字の謎
高津道昭著 / 新潮選書刊；1990

●思考を磨く

本学部に来て間もない頃、ある先生から尋ねられた。

――文学に普遍性はありますか？

研究対象が（イギリス）文学である私への問いかけであったが、私なりに何かは答えたものの、どう答えたかは記憶にない。どのように返答すべきか答えに窮したというよりむしろ、その問いかけそのものが私にとって衝撃であり、今でも時々思い出しては答えを考えてみる。「文学に普遍性はある」との前提での問いかけであったのか、それとも…と、質問の意図さえ考え直してみるが、考えたところで確認する手段はない。納得のいく返答ができなかった思いをフレッシュマンゼミナールにおいて話すこともあるが、いまだにこの問いに対する答えを探し続けている。

ある方が「思考を磨くことは言葉を磨くことである」と言っていたが、たしかにそうである。「思考を磨く」とは、母国語を磨くことである。

●「学生便覧」のススメ

学生便覧の教員紹介のページには「学生にすすめたい書物」欄があるが、なかなか興味深い。「メッセージ」よりも「趣味」よりも（さらには顔写真よりも？）先生方の人となりが垣間見えるものではないかと、ひそかに私は思っている。無数の出版物の中から選ばれた数冊には、選定者の思いや考えが表れるのではないだろうか。ちなみに私は、当代一の目利きと評される筆者の、鍛え上げられた「審美眼」が視覚的に楽しめる一冊『白洲正子“ほんもの”の生活』（新潮社，2001）をあげている。白洲正子は、「自分が目利きかどうかなど、私には関係ないことです。ただ、自分が好きなものだけはわかる。」（本文引用）と書いている。

一朝一夕にはけっして磨かれることがないのが審美眼の世界であろう。容易に身につかないからこそ、私には一層魅力的で価値あるものに感じられる。

●絶版もオススメ？

現在、『レオナルド=ダ=ヴィンチ　鏡面文字の謎』（新潮社，1990）という本を読んでいるが、これはすでに絶版となっている一冊である。

ものごころついた頃には本に囲まれていた。今ほどには装丁の技術なども進歩していない時代の出版物だが、これらの中には、（今のようなネット社会ではないため）実際に手に取らないかぎりは内容が確認できないものや、また、二度と手に入らないかもしれない絶版本が多く含まれていたことを後で知った。

＊　　＊　　＊

すべてのものに通ずる性質が「普遍性」であるなら、真善美の世界である（文学を含む）芸術作品には普遍性がある。“ほんもの（本物）”は“本当の物”。“本(もと)に当たる”。ネット上の検索エンジンを活用するのも良いが、図書館や書店の書棚に並ぶ書物の背表紙を目で追い、偶然手にする本との出会いもまた楽しいのではないだろうか。